

# 第9回花の国づくり共励会

## 花き技術・経営コンクール審査講評

審査委員長 樋口 春三

平成12年2月23日

平成11年度、第9回花き技術・経営コンクールは、全国から応募された14件の出品財を審査対象としました。審査は、経営内容、技術水準および地域社会に対する貢献などについて、書類及び現地調査により行われ、別紙の通り受賞者を決定しました。

今回、農林水産大臣賞に決定した愛知県一宮市の有限会社・角田ナーセリー（代表・角田隆幸氏）は、昭和47年に鉢ものの生産を始め、平成10年には花壇用苗ものを中心に、生産施設1.6ha、年間152種類、650万ポット、年商5.5億<sup>円</sup>の経営を達成しました。一方、平成7年には、「自分が生産したものは自分で価格を」という経営理念を実現するため、鉢ものの生産農家10戸の共同出資による株式会社・角田ナーセリーネットワークを設立し、生産部門と販売部門の分離独立を実行し、平成10年には10戸のネットワークグループ実績で年間500種類、2,000万ポットの多品目・量産方式を確立し、年商12億円経営を実現しました。

同じく農林水産大臣賞に決定した埼玉県川越市の奥富良雄氏は、花壇苗、鉢ものを中心に45aの施設で50種類以上の多品目生産により年商1億円の経営を実現しました。新設の施設はすべてパイプハウスと簡易ベンチ構造とし、さらに屋敷林利用よって腐葉土主体の培地を用いるなど、徹底した生産コスト削減を実行し、多品目による低コスト・高品質生産方式を確立しました。また販売は、市場出荷のほか量販店や直売など多チャンネル化し、多様化する消費者ニーズに応えようとしています。

以上のほか、農産園芸局長賞の宮城県の阿部武氏のほか3名、日本花普及センター会長賞の岩手県・菅原武氏<sup>氏</sup>ほか7名の方は、いずれも高い技術にもとづいた経営者能力を発揮し、わが国花き産業の優良モデルとしては高く評価されました。

受賞者の皆様には心からお祝い申し上げます。そして、今後ともわが国花き産業の発展にご尽力くださるようお願いし、講評とします。

第9回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

平成12年3月18日(土)

〈農林水産大臣賞〉

- ◎ 奥富 良雄 (チューリップ鉢物, パンジー苗, ニチニチソウ苗等)  
〒350-1151 埼玉県川越市
- ◎ 角田 隆幸 (葉ボタン, コスモス, 花苗等)  
〒491-0353 愛知県一宮市

〈農林水産省農産園芸局長賞〉

- ◎ 宮城県南三陸農業協同組合花き部会 (輪ギク)  
〒986-0731 宮城県本吉郡 (代表者 阿部 武)
- ◎ 渡辺 喜市 (サンダーソニア, クリスマスツリー等)  
〒401-0322 山梨県南都留郡
- ◎ 小杉 長男 (シクラメン, セラニウム等の鉢物, ハジメ, カビア, ベゴニア等の花壇苗)  
〒529-1421 滋賀県神崎郡
- ◎ 大城 清利 (輪ギク, 小ギク)  
〒905-0411 沖縄県国頭郡

〈(財)日本花普及センター会長賞〉

- ◎ 菅原 武男 (リンドウ)  
〒028-3172 岩手県稗貫郡
- ◎ 田代 正行 (カーネーション)  
〒329-1206 栃木県塩谷郡
- ◎ 木村 実 (バラ)  
〒345-0024 埼玉県北葛飾郡
- ◎ 中村 元夫 (デルフィニウム, オリエンタル系ユリ, 花木類等)  
〒399-3501 長野県下伊那郡
- ◎ 吉川 公彦 (キク, ベゴニア・センパフローレンス, インパチェンス, ベチニア等の花壇苗)  
〒639-2108 奈良県御所市
- ◎ 朝海 常祐 (輪ギク, スプレーギク)  
〒779-2108 徳島県海部郡
- ◎ 高尾 保徳 (レッシュルティア, ゴールドクレスト, サザンクロス等)  
〒839-1225 福岡県浮羽郡
- ◎ 小嶺 敏博 (コチョウラン, シンビジウム)  
〒850-0945 長崎県長崎市

## 〈農林水産大臣賞受賞理由〉

奥富 良雄 埼玉県川越市

奥富良雄氏は、埼玉県川越市で花壇苗、鉢物を中心にした経営を行っている。平成10年の施設面積は、ビニールハウス、ガラス温室合わせて4,581㎡と比較的小面積であるが、年間の売上高は1億円近くあり、3.3㎡当たりの売り上げは7万円に達している。都市近郊の有利な条件のもとで小面積の施設を有効に利用して優良経営を行っている典型的な事例といえる。

春から秋にかけての花壇苗の生産を中心にした経営であるが、花壇苗の需要が少ない冬場はチューリップ等の球根鉢物の生産を行っている。50種類以上の花壇苗を生産し、多様化する消費者の好みに即応できることが販売戦略上の強みになっており、高品質であることもあって市場での評価は高い。また、量販店にも販売し、小売も行うなど販路の多様化をはかっているのも特徴といえる。

最近建設された施設は、すべてパイプハウスであることも注目される点である。簡易ベンチの利用、手かん水の採用など、施設面積を拡大させずに低コストで高品質の花壇苗を生産するという経営方針が貫かれている。高品質生産のために屋敷林の腐葉土を積極的に利用し効果をあげているのも注目されているところである。

また、県全域の鉢物生産研究グループの創立時から中心的な役割を果たしているほか、地域ではJAいるま野川越鉢物部会の結成と同時に初代会長となり、花き経営を志す研修生を受入れ、惜しみなく氏の持つ技術を伝え、後継者の育成に努めている。

以上の点からみて、農林水産大臣賞受賞に値するものと評価された。

角田 隆幸 愛知県一宮市

角田隆幸氏（有）角田ナーセリー代表）は、愛知県一宮市で昭和47年に鉢物生産を開始し、平成10年には生産施設1.6ha、花壇用苗物を中心に年間152種類、650万鉢、年商5.5億円の経営を実現した。一方、平成7年には10戸の共同出資による（株）角田ナーセリーネットワークを設立し、自ら社長に就任、生産と販売の分離方式を図った。これによって定価格による直接販売方式を進め、平成10年には10戸のネットワークグループで、年間500種類、2,000万鉢の多種類・大量生産方式を実現し、年商12億円を達成した。

角田隆幸氏の経営の特徴は、次のとおりである。

- 1) 「自分で生産したものは自分で価格を決める」という経営理念に基づいて、生産会社と販売会社を併行的に運営し、定価格・直接販売方式を確立した。
- 2) 植物は、花色別カラーポットに植栽し、花のカラー写真、植物名、メンテナンス情報をラベル化し、開花前の若苗の商品化をはかり、施設利用率の大幅な引き上げと低コスト化に成功した。
- 3) 500種類、2,000万鉢という多種類・大量生産の管理システムとして「エキストラネットシステム」を開発し、事業の合理化と商品の優利販売を実現した。
- 4) 生産システムの類別化・単純化・自動化を積極的に進め、多種類・大量生産の管理システムを確立した。
- 5) 研修生を受入れによる後継者の養成、市民講座の講師として、あるいは街の美化運動への協力など地域社会への貢献に努め、他方、生ごみの活用や生分解性ポットの開発など、環境問題への取組みも積極的に進められている。

以上の活動実績が、今後の花き技術・経営の展開方向を示すものとして高く評価された。

第9回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクールの受賞者概要

	部門	都道府県	市町村	氏名	品目	技術・経営の概要
農林水産大臣賞	個人	埼玉県	川越市 かわごえし	奥富良雄 おくとみよし	チューリップ鉢物 パンジー苗 ニチニチソウ苗等	春から秋にかけての花壇苗を生産し、多様化する消費者ニーズに对应して50種類以上の品目を生産している。花壇苗の需要が少ない冬場は、チューリップ等の球根鉢物の生産を行い、簡易ベンチの利用、手かん水の採用など、施設面積を有効的に活用し、近年の施設化はパイプハウスで行う等、低コストで高品質の花壇苗を生産するという経営方針が貫かれている。
	個人	愛知県	一宮市 いちのみやし	角田隆幸 つのだたかゆき	葉ボタン、コスモス 花苗等	「自分で生産したものは、自分で価格を決める」という経営理念に基づいて、花壇苗を中心に年間152種類、650万鉢の生産を行っている。生産会社と販売会社を併行的に運営し、定価格・直接販売方式を確立した。生産システムの種類・単純化・自動化を積極的に進め、多種類・大量生産の管理システムを確立した。開花前の若苗の商品化をはかり、施設利用率の大幅な引上げと低コスト化に成功した。
農産園芸局長賞	団体	宮城県	志津川町 しづかわちやう 歌津町 かづのまち 本吉町 もとよし 津山町 つやま	南三陸農業協同組合 なみさつなげい 花き部会 みなみさつなげい なみさつなげい なみさつなげい なみさつなげい	輪ギク	省力的な栽培技術として、「直挿し栽培」について、リーダーがいち早く、技術実証し、普及拡大。土壌を改良するため、稲わら・糞がら堆肥を自家生産して施用。エテホンの開花遅延効果を利用した夏ギク（サマーイエロー）の開花調節と、秋ギクの電照栽培・シェード栽培の組み合わせにより周年生産を図っている。
	個人	山梨県	鳴沢村 なるさわむら	渡辺喜市 わたなべきいち	サンダーソニア, クリスマスマツリ一等	サンダーソニアの栽培に取組み、一般に困難とされる実生繁殖技術や球根貯蔵技術を確立し、安定生産とコストの低減を図った。
	個人	滋賀県	五箇荘町 ごかそうまち	小杉長男 こすぎおさお	花壇苗, シクラメン	パイプハウスの有効利用。苗物生産における管理作業の効率化と品質の安定化を図るため、培土の自家配合の実施。
	個人	沖縄県	今帰仁村 いまきんじん	大城清利 おおしろきよとし	キク	12月出荷から切り戻しによる5月出荷まで無理のない労働力の配分。計画出荷や圃場の有効利用。再電照によるボリューム感のある草姿の仕上げ。収穫後ソルゴー栽培による土づくり、連作障害の防止及び土壌の保全。

	部門	都道府県	市町村	氏名	品目	技術・経営の概要
(財) 日本花普及センター 会長賞	個人	岩手県	石鳥谷町 いしどりやちやう	菅原武男 すがはら たけお	リンドウ	半促成栽培、露地栽培の作型により、極晩生種まで品種をバランスよく配分し、時期による出荷数量の適正配分。市場価格の変動による影響の軽減化を図った。
	個人	栃木県	高根沢町 たかねざわちやう	田代正行 たしろ まさゆき	カーネーション	品質重視の生産を図るため、雇用労力を積極的に取入れ、管理作業の適期配分。自動防除機、細霧冷房を取り入れ省力化と夏期の高温対策を図り、栽植密度を3.3㎡当たり40株と少なくし、種苗費の低減を図った。
	個人	埼玉県	杉戸町 すぎとまち	木村実 きむら みのる	バラ	栽培法改善による技術・品質の高位平準化。消費者ニーズを先取りするため50品種を導入。選花場の独自照明による「厳選」の実施。
	個人	長野県	大鹿村 おおしかむら	中村元夫 なかつら もとお	デルフィニウム、オリエントルネユリ、花林檎等	条件不利地域での中山間地での花き専作経営の確立。高冷地育苗による良苗生産。有機質施用による土づくり。高温障害に強く株落ちしない技術の確立。有機質肥料の施用、切り下球2度切りによる低コスト生産。
	個人	奈良県	御所市 ごせし	吉川公彦 よしかわ きみひこ	キク、ペゴニア・センバクローソス、バチユニア等の花苗	ベンチ栽培による病気発生時の軽減と省エネ生産。セル育苗を外部委託により栽培に専念でき、施設の利用効率が向上。新品目の積極的導入。
	個人	徳島県	由岐町 ゆきちやう	朝海常祐 あさみ つねすけ	輪ギク、スプレーギク	施設を海岸近くに設置したため、鉄骨作りとし、台風被害の軽減を図った。パワースプレーによる深耕と有機物や木炭による土壌改良により、良品の計画的な周年生産の確立。
	個人	福岡県	田主丸町 たぬしまるちやう	高尾保徳 たかお やすのり	リュウノヒゲ、ゴールドリスト サザンクロス	国内外を問わず、新素材の発掘に努めている。輸入種について用土、水管理、温度管理、植物生育調節剤等を工夫し、現地に適合する技術の開発。リハイバル商品の生産。
	個人	長崎県	長崎市 ながさきし	小嶺敏博 こみね としひろ	コチヨウラン シンピジウム	クーラー導入によるコチヨウランの周年出荷。除湿器の導入による品質の向上。自家育種によるオリジナル品種の育成。コンポストの改善を図った。

第8回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール審査講評

平成11年2月8日  
審査委員長 樋口 春三

平成10年度、第8回花き技術・経営共励会は、全国各府県から推薦された9出品財を審査の対象としました。審査は8名の審査委員の合議により、経営内容、栽培技術および地域社会に対する貢献などについて慎重な審査が行われ、受賞者は別紙のとおり決定しました。

今回、農林水産大臣賞に決定した岐阜県美濃加茂市の間宮敏明氏(39)は、鉢ものハイビスカスの単品大量生産方式と施設投資を必要最小限に抑えた低コスト化を達成するとともに、高い市場シェアによる有利な価格形成を実現し、年間販売額6,000万円あまりの高収益経営を確立しました。これは今後の花き技術・経営の展開方向を示す先進的なモデルになるものとして高く評価されました。

また、同じく農林水産大臣賞に決定した、福岡県添田町の井上茂之氏(47)は、北九州の旧産炭地で中山間地という立地条件の下で、昭和45年、開拓地入植以来、切り花生産を順調に展開し、平成9年時点で4,000万円以上の販売額を達成しました。

経営の特長は、安定した年間雇傭を実現するため、カーネーション、ユリ類、アルストロメリア、トルコギキョウなど多種類の切り花を組み合わせた作型を開発し、独自の周年出荷システムを確立したことが高く評価されました。

以上のほか、農産園芸局長賞を受賞された戸谷武雄氏ほか3名および、(財)日本花普及センター会長賞の吉本利郎氏ほか2名の方々の出品財は、いずれも新技術の活用に積極的であり、省力や労力配分に多くの創意・工夫がみられ、高所得をあげておられる点が高く評価され今回の受賞となりました。

受賞者の皆様には心からお祝い申し上げますとともに、今後も、地域のリーダーとして後継者の育成をはじめ、技術・経営の指導に当たられ、わが国花き産業の発展にご尽力くださることをお願いし、講評とします。

第8回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

平成11年2月10日

〈農林水産大臣賞〉

- ◎ 間宮 敏昭 (ハイビスカス、パンジー)  
〒505-0055  
岐阜県 美濃加茂市
- ◎ 井上 茂之 (トルコギキョウ、ユリ類、カーネーション、  
アルストロメリア等)  
〒824-6011  
福岡県 田川郡

〈農産園芸局長賞〉

- ◎ 戸谷 武雄 (宿根アスター)  
〒367-0232  
埼玉県 児玉郡
- ◎ 服部 一夫 (鉢花：デュランタ、クルクマ、アデニユウ  
ム、ダチュラ等)  
〒438-0037  
静岡県 磐田市 東貝塚 80番地
- ◎ 清水 幸雄 (懸崖ギク)  
〒617-0003  
京都府 向日市
- ◎ 鹿山 雅勝 (カーネーション、ガーベラ)  
〒856-0004  
長崎県 大村市 立福寺町 949-2

〈(財)日本花普及センター会長賞〉

- ◎ 吉本 利郎 (バラ)  
〒632-0004  
奈良県 天理市
- ◎ 渡邊 和芳 (ユリ切り花)  
〒955-0116  
新潟県 南蒲原郡
- ◎ 松尾 廣文 (シクラメン、プリムラ・オブコニカ、ミニ  
バラ)  
〒511-0001  
三重県 桑名市

第8回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞理由

〈農林水産大臣賞〉

間宮敏昭 岐阜県美濃加茂市

切り花・鉢物類を取り巻く市場条件には依然として厳しいものがあるが、一方ではガーデニングや園芸療法への社会的関心の高まりを背景として、花き経営には多様な消費・流通ニーズに対応しながら低コストで供給することが求められている。

こうした下で、間宮敏昭氏はハイビスカス（鉢物）の単品大量生産による低コスト化を実現するとともに、高い市場シェアを背景として有利な価格を形成し高収益経営を確立している。

こうした低コスト化は、単に雇用労働力を導入して施設面積を拡大すれば出来るというものではなく、施設投資は必要最小限に抑えつつ、施設構造、栽培方法、作業方法等を日々改善するといった地道な努力の積み重ねがあって初めて実現されている。

特徴的な点を上げれば、露地ベンチとパイプハウスを組み合わせた生産システムを用いていることにより、施設投資を抑えながら生産規模の拡大を実現している。また、台車による圈内運搬、市場向け出荷により作業の効率化を図っている。そのためにベンチ間の通路を広くとり、移動、作業空間として活用している。さらに露地ベンチに隣接して作業棟を設け、雨天時の作業を可能とするとともに、遮光することにより夏期における作業の快適性をも高めている。

販売は、主に岐阜花き流通センターを通じて全国の卸売市場に出荷しているが、日本全国のハイビスカスの25%程度と推定される高いシェア、特に黄色系では独占的な地位を占めていることから、高い競争力を有しており安定した価格を形成している。

経営規模の拡大、雇用労働力の導入に対応して、平成7年には（有）樹香苑として法人化し、対外的な信用力の向上にも務めている。

以上の活動実績は、今後の花き技術・経営の展開方向を指し示すものであり、全国的な普及性を有するものとして高く評価できる。

井上茂之 福岡県田川郡

北九州の旧産炭地、中山間地という条件のもとで昭和45年の開拓地入植以降、切り花生産を順調に展開させ、平成9年現在、栽培面積107a、生産額4160万円、所得1058万円の経営を行っている。

雇用労力を年間平均的に活用する目的でカーネーション、アルストロメリア、トルコギキョウなど多種類の切り花を組み合わせた作型を考案して周年出荷を達成している点が経営の特徴である。多様な作型の構成のために、カーネーションの母の日集中出荷のための短期栽培技術、アルストロメリアの株冷蔵、地中冷却による開花期調節技術、ユリの2度切り栽培技術、標高400mの半高冷地に設けた第二農場を利用した山上げ栽培技術など独自の栽培技術を開発し経営に結び付けている点が評価できる。

施設に過剰な投資をしないというのが経営者の信条である。鉄骨補強パイプハウスが施設の主体となっているが、天窓自動開閉装置、自動かん水装置など省力の要になる施設装備には重点的に投資を行っている。必要な施設以外への投資を極力抑えていることが経営安定につながっているといえる。平成9年現在、借入金が零という点が経営者の信条を端的に示している。

夫婦間で家族経営協定を結び家族間の経営上の役割分担、労働報酬、休暇などについて取決めを行っているのも労務管理の新しい方向として評価できる。

また地域のリーダーとして周辺花き産地の育成に努めており、部会員54名のJA田川東部花き部会の部会長として後進の指導に当たっている点も評価される点である。

以上のように高度の栽培技術、安定した経営、労務管理能力、後進への指導能力の点から農林水産大臣賞に値する経営と評価できる。



第8回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクールの受賞者概要

別紙2

	区分	都道府県	市町村	氏名	品目	技術・経営の概要
農林水産 大臣賞	個人	岐阜県	美濃加茂市 みのかもし	間宮 敏昭 まみや としあき	ハイビスカス パンジー	露地ベンチとパイハウスを組み合わせた簡易施設を活用した低コスト生産。作業通路の確保、台車活用で作業性も向上。挿し穂からの一貫生産体制による安定的な出荷を実現している。全国でも有数の生産規模で特に黄色系は競争力が高い。
	個人	福岡県	添田町 そえだま ち	井上 茂之 いのうえしげゆき	カーネーション、ユリ アストロメリア トロギキウリなど	雇用労力を活用し、多種類の切り花を組み合わせて周年出荷を実現。株冷蔵、冷房育苗、山上げ栽培等により開花調節や作期拡大を実現。夫婦間で家族経営協定を締結。
農産園芸 局長賞	個人	埼玉県	神川町 かみかわ まち	戸谷 武雄 とや たけお	宿根アスター	吸枝の冷蔵により年間を通じた定植を可能にするとともに電照とシートで周年出荷を実現し、所得率を向上。調整機、結束機、シート巻取機など機械化を工夫。
	個人	静岡県	磐田市 いわたし	服部 一夫 はっとりかずお	鉢花 (ゲランタ、 クラマ、アデニウム 等)	大規模サボテン経営から全面転換し、新品目アデニウム等に 着目。タイで苗を育成するリレ栽培により、国内施設の回 転率を向上させ、大規模経営を実現。
個人	京都府	向日市 むこうし	清水 幸雄 しみず さちお	キク (懸崖)	伝統的な懸崖ギクの生産に、複数の花色、白鳥の型など 新しい感覚を活かした新商品を開発。家族への給与制も 実施。	
個人	長崎県	大村市 おおむら し	鹿山 雅勝 しかやままさかつ	カーネーション ガーベラ	県下のスプレカーネーションのパイオニアであり、ロケット栽培、 かん水施肥の自動化、防蛾灯の導入等による省力化、雇 用労働の活用により家族労働を軽減。	

	区分	都道府県	市町村	氏名	品目	技術・経営の概要
(財) 日本花普及センター会長	個人	奈良県	天理市 てんりし	吉本 利郎 よしもととしろう	バラ	炭酸ガス、堆肥の施用等により施設土耕栽培で周年安定出荷を実現し所得率を向上。生産額も順調に拡大。
	個人	新潟県	下田村 しただむら	渡邊 和芳 わたなべかずよし	ユリ切り花 (カダブライカ等)	球根養成と切り花の一貫生産で生産コストを低減。球根養成畑は緑肥等との5年輪作。輸入球根の廃坑利用での芽伸ばしや球根冷蔵等により高品質を実現。
	個人	三重県	桑名市 くわなし	松尾 廣文 まつひろふみ	シラン オゴシカ ミハナ	用土作りを基礎に肥培管理による開花調整で年内出荷を実現。エグアドフロー方式によるかん水自動化等で労力節減。

# 第7回花の国づくり共励会

## 花き技術・経営コンクール審査講評

平成10年2月20日  
審査委員長 樋口春三

平成9年度の花き技術・経営コンクールは全国各府県の一次審査によって選出された出品財11候補を審査対象としました。審査は8名の審査委員の合議により、経営内容及び地域社会における貢献などについて慎重な審査が行なわれ、別記の通り受賞者を決定しました。

今回、農林水産大臣賞を受賞された宮城県蔵王町の平間久義氏は、ラベンダーとハーブの鉢物生産を行い、年間約1億円の大型経営を実践しています。蔵王町という冷涼地の気象を巧みに生かし、独自の栽培技術によって高品質の鉢物生産を行いさらに植物や栽培に関する情報をキメ細かく消費者に提供しながら、マーケットの拡大に努力している点が評価されました。

同じく農林水産大臣賞を受賞された静岡県浜松市の「JAとびあ浜松PCカーベラ部会」は、17戸の花き専業農家からなる集団であります。経営の特徴は①完全な共選共販体制を確立し、1戸平均粗収益が3,000万円以上という高所得を実現していること、②パッキングセンターを設立し独自に開発した選別包装システムの設置によって「栽培」と「ポストハーベスト」を完全な分離に成功していること。③品質管理を徹底して、独自の販売戦略を立てて高い市場評価を得ることなど、今後の花き経営および産地の再編に重要な示唆を与えるものとして評価されました。

その他、農林水産省農産園芸局長賞および(財)日本花普及センター会長賞を受賞された方々は、いずれも新技術の活用に積極的であり、省力や労力配分にも多くの工夫がみられ、高所得をあげておられる点が評価され、今回の受賞となりました。

受賞者の方々には心からお祝い申し上げますとともに、今後も、地域のリーダーとして、後継者の育成をはじめ、技術・経営の指導にあたられ、ますますのご活躍を期待して講評とします。

第7回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞理由  
〈農林水産大臣賞〉

平間久義 宮城県蔵王町

平間氏は、冷涼地の特性を生かしたラベンダーやハーブの鉢物栽培を行い、平成8年の売上額が9,800万円に達する大型経営を行っている。平成10年には、新規に大手量販店との契約栽培が加わり25,000万円の売り上げが見込まれている。

経営の主体はラベンダーの鉢物栽培で、北海道と岩手県で委託生産した苗を使い、パイプハウスで5~15号鉢に仕上げるリレー栽培を行っている。気象条件を生かした独自の栽培技術によって高品質のラベンダー鉢物が生産されており、市場あるいは流通業者を通して全国に販売されている。ハーブ類の生産では、つねに外国から新しい種類の導入を試みている。また苗を販売する際には、その種類に関する情報を記載したパンフレット、ラベルを添付して提案型の販売を行っている。また、近隣の8名の生産者のリーダーとしてグループを結成し、地域産地としての拡大強化にも努力している。

J Aとびあ浜松P Cガーベラ部会 静岡県浜松市

J Aとびあ浜松P Cガーベラ部会は、17戸の花き専業農家から構成され、完全な共選共販体制を確立し、1戸当たり平均1,200万円以上の農業所得を得ている。

経営の特徴は、第1にパッキングセンターを設立し、独自で開発した選別包装システムによって栽培とポストハーベスト部門を分離し、生産労働への集中を可能にした。第2は、集荷時に抜き取り検査を実施し、徹底した品質管理体制が確立されている。第3は、部会として市場動向を分析して品種と出荷市場を選択するなど、高度の販売戦略に基づいた経営がなされている。第4には、販売戦略を実のあるものにするため、品種構成の指導、あるいは全会員の参加による巡回学習活動が行われている。

こうした活動実績は、今後の花き経営・産地の再編方向を示し、普及性あるものと評価される。

第7回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

〈農林水産大臣賞〉

- ◎平間久義 (ハーブ類, ラベンダー, 花壇用苗物類)  
宮城県刈田郡
- ◎とぴあ浜松農業協同組合 (代表 山中啓慈 33歳) (ガーベラ)  
静岡県浜松市

〈農産園芸局長賞〉

- ◎竹ノ原幸悦 (カーネーション, トルコギキョウ, デルフィニウム, ブルースター等)  
青森県十和田市
- ◎立石勝義 (ポインセチア, サフィニア, ナデシコ, ゴールドコイン等)  
埼玉県本庄市栗崎72-1
- ◎南嶋精二郎 (ベゴニア, エキザカム, カーネーション, セラニウム等)  
福岡県山門郡
- ◎本田敏英 (カーネーション, ガーベラ, チューリップ等)  
長崎県北高来郡

〈(財)日本花普及センターが会長賞〉

- ◎フローラぎふOKI (代表 種田七生) (カランコエ)  
岐阜県岐阜市
- ◎月本雅治 (バラ)  
京都市
- ◎中岡邦康 (カーネーション)  
兵庫県津名郡
- ◎市川一清 (スイートピー, ホオズキ, トルコギキョウ)  
大分県南海部郡
- ◎渡久山稔 (大菊, 小菊)  
沖縄県国頭郡

# 第6回花の国づくり共励会 花き技術・経営コンクール審査講評

平成9年2月26日

審査委員長 樋口春三

平成8年度の花き技術・経営コンクールは全国各府県の一次審査によって選出された出品財12候補を審査対象としました。審査は8名の審査委員の合議により、技術、経営内容および地域社会における貢献などについて慎重な審査がおこなわれ、別記の通り受賞者を決定しました。

花きの消費は、ここ数年来、花壇苗など一部の品目を除いて横這いあるいは減少傾向を示しています。これからの花ビジネスの展開に当っては、人々のライフスタイルあるいは消費構造の変化を配慮しつつ、意欲的な経営展開が望まれます。

今回、農林水産大臣賞を受賞された栃木県の菱沼軍次氏は、シクラメンを主体にハイドラングア、木立バゴニアを組み合わせた鉢物生産経営であります。同氏はシクラメンの育種家としても著名であり、特に平成2年には黄花品種「かぐやひめ」を発表されました。一方、栽培面では肥培管理、葉組みなどを徹底して行い、きわめて高品質の鉢物生産が行われています。

オリジナル品種と高品質鉢物の生産によって販売単価は平均3,000円と群を抜いた高い評価を受け、平成7年度の実績で施設面積3,000m<sup>2</sup>、家族5人と雇用3人の労働力で粗生産額約6,500万円、所得率45.8%の高所得を達成したことが評価されました。

同じく農林水産大臣賞を受賞された静岡県の大庭孝之氏は、パキラ、アロカシア、ユッカ、ゴールドクレストなど木本性観葉植物の大鉢生産を行っています。ガラス温室を主体にした施設面積が8,866m<sup>2</sup>、平成7年の粗生産額は2億6千万円に達し、国内でも有数の大型経営であります。

現在アロカシアでは全国シェア65%、ユッカでは60%を占めるまでに至っています。

栽培面では、わい化剤の利用による樹姿調節、パキラの「5本組み」など新商品の開発にも常に努力が払われています。また労務管理面では、家族経営から雇用経営に早くから転換し、労務管理が円滑に行われており、今後のわが国の花き生産の先導的経営として高く評価されました。

その他、農林水産省農産園芸局長賞および(財)日本花普及センター会長賞を受賞された方々は、いずれも新技術の活用に積極的であり、省力や労力配分にも多くの工夫がみられ、高所得をあげておられる点が評価され、今回の受賞となりました。

受賞者の方々には心からお祝い申し上げますとともに、今後も、それぞれの地域のリーダーとして、後継者の育成をはじめ、技術・経営の指導にあたられ、ますますのご活躍を期待して講評とします。

第6回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞理由

<農林水産大臣賞>

ヒシマツ

菱沼軍次 57歳 (栃木県)

シクラメンを主体にハイドラングア、木立ペゴニアなどを組み合わせた施設面積3000㎡、生産額6500万円の鉢物生産経営である。シクラメンの育種家として全国的に高名であり、パーバーク、ピュアーホワイト、音楽家シリーズなどの菱沼系品種を多数育成し、とくに平成2年には黄色のシクラメン“かぐやひめ”を発表している。これら自家育成の優良系品種を使ったシクラメン生産に特徴がみられる。品種改良だけでなく施肥管理、葉組み技術などの栽培技術の面でも日本のトップクラスの地位にあると認められ高品質の鉢物を生産している。新品種でしかも高品質の鉢物を生産しているので、平成8年の一鉢当たり平均販売単価は3,000円と群を抜いて高く評価されている。平均単価が高いため1a当たりの収入は122万円とずばぬけて高い。また、家族5人と雇用3人の労働力で管理を行なっているため人件費が低く所得率が45.8%と高いのも特徴になっている。温室の効率的な利用のためシクラメンと組み合わせて他の鉢物の生産も行なっているが、それらの鉢物についても商品性の高いものを生産しているので経営内容を高めるのに貢献している。

オガタ

大庭孝之 58歳 (静岡県)

パキラ、アロカシア、ユッカ、ゴールドクレストなど木本性観葉植物の大鉢生産を行なっている。ガラス温室を主体にした施設の面積が8800㎡、平成7年の生産額が2億6千万円に達するという国内でも有数の大型経営である。

木本性観葉植物のパキラ、ユッカなどの苗木生産を南米、東南アジア、台湾など生産コストの安い海外で行い、輸入した苗木を10号鉢以上の大鉢に植え込み成品に仕上げ全国の花市場に出荷している。激しい価格競争を経て現在アロカシアでは国内シェアの65%、ユッカでは60%を占めるまでになったのは、このような海外流通を視点においたコスト削減の努力の結果である。

わい化剤の利用などにより高品質の鉢物生産をはかると同時に、常に新しい商品開発の努力を続けており、市場に新商品を投入することで生産品の単価を高く維持してきた。現在は新商品であるパキラの5本組の鉢が売り上げのメインになっている。

労務管理の面では、家族経営から雇用経営に早くから転換し、農場長や各温室の責任者に常備の社員を充て、パートタイマーの労力管理を円滑に行なっている。

海外流通、商品開発、企業的労務管理など、今後のわが国花き生産の先導的な経営を行なっている点が高く評価できる。

第6回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞理由

〈農産園芸局長賞〉

あたらしひろゆき 栽培品目(カランコエ、ランタナ、ペンタス等鉢物栽培「施設」等)  
新 博之 埼玉県深谷市

氏の鉢物経営の特徴は、少品目を大量に省力生産することにより、高い収益率が確保されている。作物の種類をカランコエ、ランタナ、ペンタスだけに絞り、独自に開発した栽培技術マニュアルに従って栽培することによって大幅な省力が図られ、これを可能にしている。省力化により10アール当たりの年間作業時間が基準の約60%にまで短縮されている。氏の鉢物経営は高い技術力と優れた経営感覚により裏付けられた先進的経営が高く評価された。

てらうちいちろう 栽培品目(パンジー、ファンキュラス、にちきちそう、ルドベキア、「施設」等)  
寺内一郎 京都府久美濱市

この地域は花の栽培者は少数であるが、氏の生産技術、経営内容は府内でもトップクラスにあり、花壇苗生産専作となって4年目であるが、堅実に年々向上している。

花の栽培、農業経営に関し研究熱心で、相対取引や契約栽培により、消費者の動向を的確につかみ、独自の工夫がみられるとともに、研修生を受け入れるなど後進の指導を積極的に行っており、久御山町及び周辺市町村で先導農家としての役割を果たしている等評価の対象となった。

おおくまひろゆき 栽培品目(ばら「施設」しゃくやく「露地」等)  
大隈博幸 福岡県八女市

当初、菊の生産を開始したが、収穫や調整、植え替え作業などに労力がかさみ労働力不足をきたし、そのため、毎年植替えの不要なバラ栽培に転換。ガラス温室による施設の高度化、施設の団地化、ロックウール栽培の導入など着実に経営規模を拡大している。技術面では、夏期でも高品質の切り花が収穫できる栽培システムの選定や仕立法を1茎1芽とし、品質の向上と安定化を図るなど新技術の導入に積極的であり、その技術が高く評価された。

ほかま かつよし 栽培品目(小菊「露地」切り葉「施設」)  
外間勝嘉 沖縄県国頭郡

電照小菊と施設による切り葉との組み合わせによる周年出荷体制を確立したこと。自動結束機の導入により、出荷作業の効率化を図るとともに電照小菊に再電照法を取り入れ、ボリューム感のある草姿の品物を生産し品質の向上を図っている。毎年ソルゴーや堆肥による土づくりを行なって連作障害の防止を行なうなど技術面の努力がはらわれている。安定した経営実績と新技術の先駆的導入など地域のみならず他地域の花き生産農家の模範となっていることなどが高く評価された。



第6回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞理由

〈(財)日本花普及センター会長賞〉

さいとうたつよし 栽培品目(シクラメン、さくらそう、ペラルゴニウム、花壇用苗物類栽培「施設」等)  
齋藤達義 44歳 宮城県栗原市

シクラメン、さくらそう類、カランコエ等の主力品目の効率のよい回転、これら品目のローテーションによる施設の利用効率を高める工夫、投資を行って経営の近代化を図っている。規模拡大とともに雇用を取り入れ、雇用管理を含めた、経営記帳にパソコンを利用するなど合理的な管理を行っている。また、地域の花き栽培指向農家を誘導し、花き研究会を組織した活動は、今後の地域における産地づくりにつながるものとして評価された。

こじま ひろし 栽培品目(ばら「施設」)  
小島 宏 群馬県富岡市

農業散布者の健康を考え、無人の自動散布機を独自で開発して、これを原型とした自動散布機は現在メーカーが生産販売するなど、全国に普及している。

連作障害の回避や、省力化、マニュアル化による労力軽減を考えて、ロックウール栽培を導入し、管理を単純化するなどして雇用している多くの女性パートにも好評で、労働意欲を増進させるなどのほか、養液調整にはデータを独自で積み重ね、良品生産に努めているなどのほか、リーダーとしての活動や、経営状況等が評価されたものである。

あ ぼらみきた 栽培品目(シンビジウム、リカステラ、デンドロビウム、「施設」)  
安保幹太 岐阜県恵那市

地域の自然環境を生かして、品種をかえることにより、従来の山上げ栽培を不要とし、労働の省力化を図っていること。新品種を導入してオリジナル商品の開発を行っている。施設の近代化を図るとともに多品種栽培を行い周年出荷体系の確立を図っている他、シンビジウムに底面給水システムを導入する等、常に労力の低減を図っている。一方、規模拡大を図り、アンテナショップ的な商品直売所の設置やインターネットの利用など、生産から販売までを考慮した積極的な経営の向上に取り組んでいる点が評価されるとともに、地元農業高校へのランの栽培指導や後継者を受け入れる等地域に根ざしたりーダーとしての活動も評価の対象となった。

ほりた ひろみ 栽培品目(ガムテ・メコイデス、スイセン、花壇苗、「施設」)  
堀田泰規 奈良県橿原市

平成8年度に従来あった小規模なハウスを集約し、自動巻き上げ装置など装備した省力化栽培技術を導入。施設の丈を高くすることにより、夏の暑さ対策を図っている。

鉢花経営で、栽培品目の専作が進む中、鉢物と苗物をうまく組み合わせ、施設と労力の有効利用を図っている。奈良県で鉢花栽培技術の先駆的、中核的農家であり、地域のリーダー的経営者であって、現在33歳の後継者とともに営業しており、将来の経営発展が期待されているなど評価の対象となった。

ひろおか みのる 栽培品目(アイリス、ききょう、リアトリス、しゃくやく、ゲンジオラス「露地」宿根かすみそう、ストレッチ、「施設」等)  
広岡 稔 高知県加美郡

広岡氏は、昭和41年に就農し、昭和50年より専業農家となり、以来、土地条件に適した品目、作型の研究や、市場動向の調査、圃場条件の改善等栽培技術のみだけではなく、総合的な経営改善を図っている。一方、自ら栽培実証した成果については、JA土佐香美夜須支所花き部部員に普及する等、常に地域の産地育成に視点をおいた活動を行っており、氏の花き栽培経験に基づいた経営感覚は当地域内だけではなく広く高知県における花き産地育成に必要不可欠であること等の理由から評価された。

こ いけたつよし 栽培品目(こぎく「露地」カーネーション「施設」等)  
小池龍善 佐賀県佐賀郡

粗大有機物の投入により数年に一度の土壌入れ替えによる、土壌伝染性病害の発生を軽減させているほか、暖房用温湯の利用による土壌消毒を行って暖房経費および労力の節減をはかっている。また、市場との情報を密にして市場性の高い品種の導入を図り、収益性向上による所得の増加に心がけている。市場単価が安定しているカーネーションと施設費を多く必要とせず所得率の高い露地ぎくを組み合わせた経営により、所得の安定を図り、他の花き生産者の経営モデル的存在として評価された。

## 第5回花の国づくり共励会

花き技術・経営コンクール審査講評

平成8年2月23日

審査委員長 樋口春三

本年の花き技術・経営コンクールは、全国各府県での一次審査によって選抜された出品財11候補を審査対象としました。審査委員長以下8名の審査員の合議によって、技術、経営内容および地域社会における活動等について、慎重に審査を行ないました結果、別記のように今回は全出品財が優秀と認められ、受賞者に決定致しました。

わが国の農業情勢は厳しいものがあり、政府ではウルグアイランド農業合意が実施されるほか、「新食糧法」が施行されるなど大きな変貌を遂げつつあります。一方、花きの需要についても、景気低迷が影響していますが、これからの花き経営にあたっては、他の農作物と同様コストの低減化を図るとともに新しい需要を視野に入れた意欲ある経営展開が必要であります。今回のコンクールに応募された花き生産農家および集団では、大型化、多品目化に加えて消費者の選択に見合う新しい商品開発を取り入れた技術の導入や経営システム改善がみられます。これらは、花き産業の基盤となるものと認められますし、本コンクールの成果の一つとして評価されるものと思われまます。

今回、農林水産大臣賞を受賞された、福岡県の波左間広美さんは、ファレノプシス、デンファレ、観葉植物の鉢物生産を行い、平成6年の農業所得は3億4、000万円、所得が3、000万円に達するという、わが国でもトップクラスの経営を行なっておられます。今回のコンクールで評価の対象となった主な点は（1）温室を一ヶ所に集結して作業能率を高めるとともに、責任分担を明確にした近代的労務管理が行なわれていること、

（2）ランの品種改良に力を入れオリジナル品種の商品化がはかられていること、（3）観葉植物とランをアレンジしたクリスマスグッズなど独自の商品開発がなされているなどであります。同じく農林水産大臣賞の岐阜県の農業組合法人、ロイヤルグリーン（代表理事・福田誠）さんは、昭和58年、3人のセントポーリア生産者によって設立されましたが、現在は、15、000<sup>2</sup>m<sup>2</sup>温室にセントポーリア、ポットマム（ヨダーマム）、コニファーなど、合わせて年間160万鉢を生産・出荷されています。年間収入は約3億2、000万円、所得は5、400万円に達しており極めて高水準の花き経営として評価されました。経営の主な特長は、（1）自動化・省力化システムが合理的に導入され大規模経営を確立したこと。（2）販売先は全国70市場他、園芸専門店、量販店、小売店など幅広いマーケットが確保されていること。（3）多角的な販路開発によって少品目・多量生産方式によるコスト低減を実現したこと。（4）地域の流通センター設立に積極的に貢献したこと。などであります。

その他、農林水産省農産園芸局長賞および（財）日本花普及センター会長賞を受賞された方々は、いずれも新技術の活用に積極的であり、省力や労力配分にも工夫のあとがみられ、高所得をあげておられる点が評価され、今回の受賞となりました。

受賞者の方々には重ねてお祝いを申し上げますとともに、今後も、それぞれの地域リーダーとして、後継者の育成をはじめ、技術・経営の指導にあたられ、ますますのご活躍を期待いたしまして講評といたします。

第5回花の国づくり共励会

花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

<農林水産大臣賞>

農事組合法人ロイヤルグリーン 代表者

福田 誠 (セントポーリア、カランコエ等)

岐阜県本巣郡

波左間廣美

(ファレノプシス、デンファレ、観葉植物等)

福岡県福岡市

<農産園芸局長賞>

萩原久雄

(シクラメン、P・ポリアンサ、ゼラニウム、花壇用苗等)

群馬県安中市

千野純一

(ニュウギニアインパチエンシス、ゼラニウム、ガーベラ等)

埼玉県比企郡

農事組合法人 飯田花き生産組合 代表者

時松 謙 (バラ等)

大分県玖珠郡

宮平憲勇

(コギク等)

沖縄県読谷村

<(財)日本花普及センター会長賞>

手島 徹

(シクラメン、ペラルゴニウム、リーガースベゴニア等)

宮城県古川市

矢野伸太郎

(ストック、アイリス、ヒアシンズ、コギク等)

京都府宮津市

多田 護

(台杉、カシ類、ケヤキ、コニファー類、ベニカナメモチ等)

奈良県宇陀郡

水田善雄

(露地ギク等)

佐賀県佐賀郡

金本達夫

(バラ等)

長崎県佐世保市

第5回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞理由

<農林水産大臣賞>

農事組合法人ロイヤルグリーン

代表者

フダ マト

福田 誠 (岐阜県)

農事組合法人 ロイヤルグリーンは、昭和58年、3名のセントポーリア生産者によって設立され、現在約15,000m<sup>2</sup>の温室経営がなされている。平成6年の生産量は、セントポーリア約100万鉢に加え、カランコエ、ポットマム（ヨーダーマム）、コニファーなど総数で約160万鉢を生産出荷している。年間収入は約3億2,000万円、所得は約5,400万円に達しており、極めて高水準の花き経営として評価された。経営の主な特徴は、ポッティングマシン、移動ベンチ、底面給水、小型リフトなど、一連の自動化、省力化システムが合理的に導入されていること、同時に、販売先は全国の花き市場約70社に加え園芸専門店、量販店、小売店など幅広い販売先をもち、生産効率の高い小品目大量生産方式が効果的に運営されている点である。また、昭和62年に設立された岐阜花き流通センターは、岐阜県の花き産業にとって重要な役割を担っているが、これの設立にあたってロイヤルグリーンが中心的な役割を果たしたことも評価の対象となった。

ハ サマ ヒロ

波左間広美 (福岡県)

ファレノプシス、デンファレ、観葉植物の鉢物生産を行い、平成6年の農業所得が3億4,000万円、所得が3,000万円に達するという、わが国でもトップクラスの花き経営を行なっている。温室を一ヶ所に集結して効率的な生産を行なっていることが経営を成功させる一因になっている。2名の技術者を社員として常雇し、30人前後のパート労務者への作業の指示、技術指導に当たらせており、責任分担を明確にした近代的な労務管理を行なっている点も評価できる。市場での評価が高いのは品種改良や商品性の高い種類の開発を心がけている結果である。苗を東南アジアの生産者に委託生産させているなど国際的な感覚で経営に取り組んでいる。最近、観葉植物と組み合わせたクリスマス・グッズの通信販売も開始しており、経営の多角化を図っている点も評価できる。

<農産園芸局長賞>

ハクワ ヒサ

萩原 久雄 (群馬県)

鉢物生産を中心とした経営から、規模の拡大に合わせ、花壇苗の春物生産を積極的に拡大することで、生産ローテーションを確立している。現在32百万円の生産額をあげ、群馬県花壇苗生産安定協議会を設立し、現在も会長を務めている。年数回、技術や情報の交換等を行い花壇苗の産地化を目指すとともに、フラコン保全協議会の活動を通じて、フラコン容器の保全に関する事業推進をおこなっているなど評価の対象となった。

チノ シュンイチ

千野 純一 (埼玉県)

シクラメン栽培の技術確立には長い経験を要することや、労働生産性の面とか、県内他産地と比較し直売には不向きな立地条件であることから効率的に生産でき、かつ多品目を栽培することで危険分散の可能な草花鉢物経営に切り替え、平成4年の3千百万円から同6年には35百万円と成果をあげている。埼玉西部鉢物研究会の発足当初から会の活動に参加し、現在は、副会長として会の運営に尽力しているなどの点で評価された。

ハノダ

農事組合法人 飯田花き生産組合

代表者

トキマツ ヌル

時松 謙 (大分県)

地域の自然条件(夏季冷涼、豊富な地熱)を充分活かした栽培を行なうと共に、集団のメリット(安定出荷、品質向上、省力化等)を反映した経営を行なっている。

この集団経営が模範となり、県内の他の地域にも集団化による花き栽培が波及し、バラはもちろんのこと花き経営のモデル産地となっている。平成6年の生産額は184百万円で、1戸当たり18百万円の生産額は、大きく評価された。

ミヤヒラ ケンユウ

宮平 憲勇 (沖縄県)

366アールのコギク専作の大規模経営で、平成6年度における生産額は、69百万円をあげており、所得水準でも県の目標を達成している優秀な生産農家である。

2回収穫法による土地生産性の向上、再電照法による品質の向上、手選別による出荷規格の徹底をはかるなど、地域における先進的役割を果たしている点などが評価された。

平成7年度には、省力化にむけてキク定植機と自動結束機を導入し、生産コストの低減化を図っている。

< (財) 日本花普及センター会長賞 >

テマ トル

手島 徹 (宮城県)

県内でも特に水稲への依存度の高い地域にあって、複合経営のモデルとなっている。平成6年度における生産額は、40百万円で、ほぼ前年並みの安定した生産を行なっている。地元小学校への花壇苗の供給や、県内福祉施設活動への協力など、地域社会に貢献している。雇用労力の確保、省力化技術の導入により、安定的に規模拡大が図られており、県鉢物生産組合の中堅として、今後の活躍が期待されている。

ヤノ ノタロウ

矢野伸太郎 (京都府)

冬期の気象条件が厳しい京都府の丹後地域において、無加温によるストックを導入し、京都府内第1位の切り花産地を形成した重要な方で、平成6年度における生産額は、929万円に対し、支出が96万円と少なく、生産効率がよい。花きに関する数多くの組織の設立に関わり、責任ある役職を積極的にこなしているなどの点が評価された。

タダ マチ

多田 護 (奈良県)

従来の植木栽培では出荷時に根巻きを行なっているが、出荷時期が限定され、数種の樹種を組み合わせても年間の労働時間に偏りがみられた。ベニカナメモチのポット栽培を導入することにより、季節、天候を問わず年間を通じて計画生産することができ、労働力の有効利用と所得の拡大を図っている。生産団体の会長や副会長を長年務めるなど、地域のリーダーとして活躍し、地域への貢献度が高いこと等が評価された。

ミタ ヨシ

水田義雄 (佐賀県)

県内における夏秋露地ギク産地は、北部山間地、佐賀平坦地等であるが、高齢化や他作物への転換等で面積が減少傾向にある。その中で、水田氏は、露地ギク栽培に取り組んで25年目をむかえ夏秋ギク栽培に意欲的で、生産技術についても県内トップレベルにある。安定生産、出荷期の延長を目的に同氏を中心に雨よけ施設を導入予定で、地区におけるリーダー的存在であること等が評価された。

カネトシヲ

金本達夫 (長崎県)

本バラ園は、90アールと大規模経営が行なわれており、この内、約54アールで、自動給液システム及び自動移動式防除機を県内で唯一、氏のハウスで導入し、定植準備の省略、灌水、施肥、防除の省力化を図った。自動給液システムの導入により収穫本数の増加と秀品率の向上につながった点等が評価された。

平成7年3月10日

審査委員長 樋口 春三

本年は、全国各県での一次審査によって選抜された出品財11候補を審査対象としました。審査委員長以下8名の審査委員の合議によって、技術・経営内容及び地域社会活動等について、慎重に審査を行ないました結果、別記のように今回は全出品財が優秀と認められ、受賞者に決定致しました。

わが国の農業を取り巻く情勢は厳しく、なかなか明るい展望が見えて参りませんが、政府では、ウルグアイ・ラウンドの受入れに伴う国内対策について農政審議会を開催し「新たな国際環境に対応した農政の展開方向」を審議して参られました。そのまとめの一つに、「意欲ある農業者の創意工夫の発揮と自由な経営展開が可能となるよう農業を取り巻く規制のあり方を見直すこと」とあります。

そのような背景のなかで、今回のコンクールに応募された花き生産農家の経営規模は、昨年同様、大型化と多様化の傾向がみられ、他の農業分野に比べて、ひと足早く欧米に伍する企業経営が定着し、また新しい技術の導入や経営システムの改善等整備の拡充を図っておられます。今後の日本の農業にとって心強い動きであるといえますし、本コンクールの成果のひとつとして評価してよいと思います。

今回、農林水産大臣賞を受賞された宮城県の渡辺俊さんは、東北の寒地にかかわらず鉄骨ハウス5棟、パイプハウス5棟と順次5千㎡に規模拡大を図り、シクラメンを始め多くの鉢物及び花壇苗の大型経営を行い3千万円近い高い所得を挙げておられ、県内農業者の魅力あるモデル的存在であり、また花壇苗供給を一手に引受け、町の花いっぱい運動にも貢献しておられます。

同じく大臣賞の埼玉県の金子正さんは、市街化地域の農業経営の将来性と花の需要拡大を期待し、所得3千万円を目標に、流行を先取りするアイデアで積極的に10数種の輸入球根を導入する他、草花、鉢物の多品目大量生産を行い成功しておられます。また、国内外の20名の研修生を受入れ後継者育成指導にあたる他、地元の各種団体の長として社会活動の貢献も高く評価されています。

その他、農林水産省農蚕園芸局長賞、(財)日本花普及センター会長賞を受賞された方々は、いずれも新技術の活用に積極的であり、省力化や労力配分にも工夫のあとが見られました。また、それぞれの地域の特性を生かした経営の展開、出荷体制の確立など多くの工夫創意が見られ高い所得をあげておられる点が評価され、今回の受賞となりました。

受賞者の方々に重ねてお祝いを申し上げますとともに、今後も、それぞれの地域のリーダーとして、後継者の育成をはじめ、技術と経営の指導にあたられ、益々のご活躍を期待致しまして講評といたします。



第4回花の国づくり共励会

花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

《農林水産大臣賞》

渡辺 俊 (シクラメン, 花壇用苗物, プリムラ類等)

宮城県栗原郡

金子 正 (カラジューム, チュウリップ, ゼラニウム等)

埼玉県志木市

《農林水産省農蚕園芸局長賞》

中山 忠義 (洋らん切花, 洋らん鉢物等)

群馬県藤岡市

和佐野 猷 (コショウラン, オンシジューム等)

福岡県甘木市

中江 広城 37歳 (輪菊等)

佐賀県唐津市

志賀 智貴 (シンテッポウユリ, オリエンタルリリー等)

大分県直入郡

《(財)日本花普及センター会長賞》

木村 勇一 (プラグ苗, ポット苗, カットパック苗等)

岩手県下閉伊郡

林 一郎 (ポインセチア, ゼラニウム, エキザカム等)

岐阜県大垣市

明崎 勝治 (ダリア切花, ダリア球根生産, エレムルス等)

奈良県宇陀郡

町田 一弘 (スイトピー, スターチス等)

長崎県南高来郡

利田 正明 (カーネーション等)

鹿児島県揖宿郡

第4回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞理由

《農林水産大臣賞》

渡辺 俊 (宮城県)

東北地方という寒冷な立地条件を逆に利用し、シクラメン、プリムラ類、リーガースペコニア等の鉢物を主体とした大規模な企業的経営を展開し3千万円近い所得をあげている。技術面では、夏期の夜冷を活用した適期生産、植物調節剤を用いた適規格品の生産とともに、底面灌水を全面的に導入して省力化を図っている。経営面では、若年男子の正社員雇用、従業員の福利厚生充実等により雇用労働力の定着を図るとともに、育苗の外部委託や卸売業者との契約的な取引等、関連業者を有効に利用して、無理のない規模拡大を図っている。また地域においては鉢物生産組合のリーダーとして活躍するとともに、町の花いっぱい運動にも花壇苗を供給するなどして貢献している。

金子 正 (埼玉県)

宅地化が急速に進む東京近郊で、鉢物花きの生産で、年間売上が1億円に近く、所得率が21%という全国でもトップクラスの企業的大規模経営を行なっている点がまず注目される。

輸入球根を使ったチューリップ、ムスカリの鉢物やマーガレット、カラジュームなど多品目生産が経営の特徴で、生産する品目は市場で高い価格で取引されるものを選択するよう努めている。そのため、日頃から市場動向の把握や、国内の新品種に関する情報の収集に務め、優れた品種をいち早く導入し、商品化している。また、在来の品種も商品形態に工夫をこらすことにより新需要を開拓するなど流行を先取りする形で経営努力を行なっている。

比較的狭い敷地に温室を効率よく集中し、施設に過剰な投資をせずコストの低減に務めている点も評価できる。農業経営のかたわら地元への奉仕活動や研修生制度による後継者の育成にも尽力している。

《農蚕園芸局長賞》

中山 忠義 (群馬県)

洋ラン（切り花、鉢物）に取り組んで20年、現在35百万円の生産額である。地元組合のリーダーとして組織をリードしてきた。その間シンビジウムの共選共販の実現、バーコード利用による集出荷システムを導入し質量ともに全国有数の産地に発展してきたのは氏の功績大である。洋ラン組合長の他中学・高校のPTA会長他地域社会活動に積極的に参加し、信頼も篤い。

和佐野喜代太 (福岡県)

西日本一の鉢物産地で、コチョウランを主にオンシジュームを栽培し9千万円を生産額をあげている。技術面では炭酸ガス施用技術をいち早く導入、植物調節剤の有効利用、組織培養施設を整備し、オリジナル品種の開発に務めるなど積極的経営を展開している。また地元の農協の鉢花部会長、洋ラン研究会長などリーダーとして多大の貢献をしている。

中江 広城 (佐賀県)

輪菊（秀芳の力白・黄）の専作経営であり、家族4人の労働力が荷重にならないよう効率的に配分した経営で、雇用は摘心・摘らいのみである。そのため1千万円の所得をあげているが、所得率も60%と高い。年3作の周年出荷体制を確立し、施設管理の省力化を進め、家族全員がゆとりのある農業をめざしている。

志賀 智資 (大分県)

九州の中央の準高冷地気象を生かした花き栽培を目指しており、シンテッポウユリの育種によるブランド化と、オリエンタルリリーの養成球利用によるコスト低減を行い、経営の安定化に取り組んできた。平成3年の15百万円から5年には4千万円と生産額をあげ、夏期の露地（新テッポウユリ）と周年の施設花き（オリエンタルリリー）の導入により所得の向上と労働の平準化を図り、安定経営を行っている。また、県花きアドバイザーとしてユリ農家のリーダーとして活躍している。

《財団法人 日本花普及センター会長賞》

木村 勇一 (岩手県)

夏期冷涼な高涼地(800m)の気象条件を生かし、宿根かすみそうを栽培、その後、デルフィニウム、エリンジュームの露地もの、トルコギキョウ、スターチスの施設ものを導入、またプラグ苗、ポット苗、カットパック苗を契約栽培。花壇用苗も生産。更に直売所を設け少量多品目の切花を販売し周年出荷体制を確立し、2千万円以上の収入を得ている。また、農業青年クラブの会長等を歴任し県青年農業士の他多くの地域社会活動に貢献している。

林 一郎 (岐阜県)

25年間の鉢花(ポインセチア、ゼラニウム、エキザカム他)を生産し4千万円以上の収入を得ている。作型の異なる複数品目を組合せ施設の周年利用、作業の平均化、労働時間の短縮のための底面給水栽培。省力化施設の配置等に積極的に取り組んでいる。

また地元の花弁園芸振興会長、シクラメン組合長を務め社会活動も活発に行っている。

明崎 勝治 (奈良県)

昭和26年からの輪菊の切花栽培を行って来たが、30年から露地ではダリアを中心に、施設はテッポウユリ、カラー、エレムルスを組合せ、高収益をあげている。また、産地適性品種の選抜、改良を行い登録品種の作出に至っている。

県花き植木農協の花き副会長他区長、社会教育委員等地域活動にも貢献している。

町田 一弘 (長崎県)

スイートピー、スターチス、種子ばれいしよを組合せた労力配分を行い安定経営を行っている。スイートピーは厳重な選別により他産地より25%高い高品質のものを系統共販している。そのために、パソコンを活用し、簿記記帳、経営分析を行い生産、出荷計画を行っている。花き生産組合長として出荷基準の策定他スイートピーのブランド産地の維持、拡大に努めている。

利田 正明 (鹿児島県)

昭和48年にUターンしピーマン栽培を行っていたが昭和59年からビニールハウス6千㎡のカーネーションの専作経営に切りかえ、平成5年の販売額は23百万円、給料制を実施。毎週日曜日を休日とし三世代同居で子供との対話他娯楽を取り入れ生活をエンジョイしている。町議員、農協役員、中学PTA会長等地域活動に貢献している。